琉球大学学術リポジトリ

大学における老年学の可能性に関する事例報告　－老年学への招待－

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2011-04-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 下地, 敏洋, Shimoji, Toshihiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19034

大学における老年学の可能性に関する事例報告
－老年学への招待－

下地　敏洋*

A Case Study on the Possibility of Establishing a University Comprehensive Gerontology Curriculum: An Introduction to Gerontology

Toshihiro SHIMOJI*

Summary

This article aims at considering the possibility of establishing comprehensive gerontology curriculums in Japan's universities based on students' impressions of a lecture related to gerontology. Japan is a mature society with an elderly population aged 65 years or over, of 2,822 million accounting for 22.1 percent of the population. The Japanese government has recognized the importance and the necessity of interdisciplinary research programs such as gerontology in college and graduate levels. However, there are few universities with gerontology programs in Japan.

After lecturing on gerontology to university students, their impressions of the elderly, their later years, and an aged society were surveyed. The results show that they understand the importance and the necessity of studying gerontology in university curriculums. In the U.S., the Gerontological Society of America and the Association for Gerontology in Higher Education have already been established and 37 universities have masters programs and five universities have doctoral programs in gerontology. This is the best time for Japanese universities, like the University of the Ryukyus because there are many universities that collaborate in the neighborhood, to initiate gerontology programs. Establishing gerontology programs at university levels is important to understand the real aging process and improving our subjective well-being in later years.

本事例報告は、観光産業科学部の提供科目である「長寿の科学」において、著者が担当した「老年学への招待－サクセスフル・エイジングを通して－」の講義内容に基づくものである。

Ⅰ．はじめに

内閣府の発表(2009)によると、我が国の総人口に占める65歳以上の高齢者の割合は22.1パーセント(2008年)となり、超高齢社会を迎えている。また、65歳以上の人口も2,822万人を超え、過去最高の人数となった。この傾向は今後も続くと予想され、平成25年(2013年)、我が国の総人口に占める65歳以上の高齢者は25.21パーセントで4人に1人、2030年には31.8パーセ

* 琉球大学教育学部

ントで3.2人に1人、2055年には40.5パーセントで2.5人に1人が65歳以上になると予測される。75歳以上の高齢者が総人口に占める割合も上昇を続け、2055年には26.5%となり[1]、総人口の4人に1人を占めるものと予測される。

また、平均寿命も1935年の男性46.92歳、女性49.63歳から、2008年には男性79.29歳、女性86.05歳となった。2055年に、男性83.67歳、女性90.34歳になるものと予測され[1]、我が国は世界のどの国も経験したことのない超高齢社会を短期間で迎えることになる。

このような状況の中で、全国の小学校、中学校、高等学校において高齢者あるいは老化に関する正規の授業が実施されている報告はない。また、国内では、老年医学の講座が全国80の医科大学あるいは医学部の約4分の1で設置されているが、学際的な学問としての老年学は、大学院レベル又は学部レベルでも講座あるいは研究科として設置されているものは少ない[2]。現在、高齢者や老化に関する講義科目を設置している大学は桜美林大学のみであるが、修士課程及び博士課程を設置しており、老年学の領域に従事する研究者や実践家を養成している。

一方、米国においては、1965年のthe Older Americans Actが通過して学際的な老年学教育が開始された。現在、学部課程が31大学、修士課程が37大学、博士課程が5大学で設置されている。1964年、南カリフォルニア大学に米国退職者協会の寄付金によりアンドラス・ジェロントロジーセンターが設立され、1975年に大学院を創設し、1989年より博士号を授与している。現在、学部課程、修士課程、博士課程を設置して老年学教育及び研究の最先端にあり、世界の老年学研究を牽引している。また、米国老年学協会、その傘下にある高等教育老年学協会、北テキサス大学を拠点とする全国高齢化教育学習学会の設立により、大学だけでなく幼・小・中・高校までに高齢者や老化に関する教育を生涯発達という視点から学ぶ機会が提供されている[2]。

高齢期は、生き続ける限り誰もが経験する重要なライフステージであるにも関わらず、老化の過程を生涯発達の視点から捉えることの欠如に加え、衰退というイメージが先行し、正しい老化の過程を学ぶ機会が十分とはいえない状況にある。このことが、老人差別や偏見を生み出すばかりでなく、自己の高齢期のライフステージにおけるＱＯＬにも少なからず影響を与えるものと考えられる。柴田(1999)も、「老年学は加齢学や高齢者に関する問題のみでなく、むしろ生涯発達理論や世代間問題をも研究する学問といえよう。」と述べている[3]。このことは、老年学の必要性と重要性と学際的な学問であることを示唆しているものと考えられる。

このような時期に、大学生に対して老年学の概論を通して、高齢期の基礎的な情報を提供することは、超高齢社会に生きる彼らにとって有益であり、かつ老年学の確立に寄与するものと考え、本講義を実施した。

従って、本稿は、講義を通して大学生の高齢期に関する考え方を把握し、大学において教科としての学際的な老年学の設置の可能性とその現状について報告することを目的とした。

Ⅱ．老年学について

エイジング大事典によると、老年学(Gerontology)には次のような内容が包含されている。つまり、①生涯発達から捉えた生物学的、心理学的、社会学的な老化や高齢期に関する科学的研究、②高齢期における適応などに関する科学的研究、③老いの意味を多角的な視点から考える人文科学（歴史学、哲学、文学など）的研究、そして④高齢者に関するデータを政策などに活用するなどの中高年者に有益な知識の応用などである[4]。

このように、老年学とは、老化に対して、医学、生物学、心理学、および社会学などの各領域から老年期を多面的に解明していくだけでなく、老年期に直面する身体的または精神的問題等に総合的に対処することで人生の意味を科学的に探究する学際的な研究領域であるといえる。

しかしながら、我が国における老年学の普及には多くの課題がある。柴田(2007)は、我が国における老年学の課題として、老年学の応用

の遅れを指摘している[5]。このことは、研究者の中に基礎研究を応用することに対する価値観の低さや応用のための学問の重要性が認知できなかったことを要因として挙げている。また、老年学は、学際的な学問であるばかりでなく、成熟した社会において発達する学問であるため、欧米と比較して高齢化社会が急激に進んだ我が国ではその必要性は共通理解されているにも関わらず、学問として発達する機会を逸してきたとも考えられる。老年学は、老化を生涯発達の視点から捉え、人生の最終ステージにおいて、自己の人生を統合し、人生の価値や意味を高めるために必須であると考えられる。しかし、超スピードで高齢社会に突入した我が国においては、高齢者や老化に対する偏見やマイナスイメージが先行してしまい、老年学を受け入れるのに時間を要しているものと考えられる。

Ⅲ. サクセスフル・エンジングと主観的幸福感について

幸福感に関連する用語として、サクセスフル・エイジング（successful aging）と主観的幸福感（subjective well-being）がある。サクセスフル・エイジングが広く認知され始めたのは、1961年に発表されたHavighurstの論文[6]からであり、「健康で長生きしていて、満足と幸福を感じられるような老いの過程」[7]として理解され、老年社会学や心理学、看護学などの領域で活用されている[8]。また、主観的幸福感は、サクセスフル・エイジングの主要な要素として、1978年にLarsonにより提示された概念であり[9]、「高齢者が自らの人生や生活に抱いている主観的な充足感」と定義されている。

主観的幸福感の研究を概観すると、測定尺度の開発に関する研究、および規定要因の探索に関する研究の2つの流れがある。

測定尺度の開発の研究は、主に外的・属性的な側面の測定と内的・情緒的な側面の測定がある。前者の例として、家族、友人、仕事、余暇、宗教、社会的地位、健康、経済状態などがあり、後者の例として、生活満足度尺度A（Life Satisfaction Index A：Neugarten et al.，1961年）、情緒均衡尺度（Affect Balance Scale：Bradburn，1969年）、PGCモラール・スケール（Philadelphia Geriatric Morale Scale：Lawton，1975年）などがある。一方、規定要因の研究としては、健康状態、性、年齢、婚姻状態、経済状態、雇用状況、社会経済的地位、住宅条件、交通の便、社会活動、ソーシャル・ネットワークなどがある[10]。しかし、主観的幸福感に関連した研究は、概念規定の曖昧さや理論的基盤の弱さがあり、研究の水準としては未だ発展途上段階にある[11]ことも指摘されている。その中でも特に、健康状態については、先行研究において最も影響があることが明らかになっている[12~14]。

Ⅳ. 講義内容について

本講義は、実施回数の都合上、老年学の総論として実施した。実施日は平成21年8月3日（月）の1時限目、対象は1年生から4年生の男子33名、女子37名、合計70名であった。

講義における各項目と内容の詳細について紹介する。

A.高齢期に対するイメージについて

講義の導入時において、1分間目を閉じて、高齢期における自分自身について想像してもらった。この活動は、現在本人が高齢者や高齢期に対して持っている考えやイメージを反映するといわれている。また、導入時に実施する利点としては、自己の高齢期の様子について考えることで、気持ちを講義に集中させることができ、かつ講義の内容を自分自身の将来の姿として捉えることができると考えた。

1分後に目を開けて、3名の学生に彼らがイメージした高齢期における自分自身のイメージを報告してもらった。内容は三者三様で、「健康で元気があり、孫に囲まれて楽しそうであった」、「家族や親戚の皆さんと離れて暮らしており、家の中でテレビを観て過ごしていた」、「友人と一緒に楽しくやっていた」などと報告した。この活動は、現在、私たちの高齢者に対するイメージであると考えられるため、この活動が講

義のブレイクスルー的役割を果しているものと推測される。

学生が日常生活で高齢者と接する機会の多い人とそうでない人、自分自身の高齢期に向けて準備をしている人とそうでない人など生活環境は様々である。しかし、正しい老化の過程を理解することは、将来のライフイベントに対応するばかりでなく、彼ら自身の高齢期に備える上からも重要であり、この活動は有益であると考えられる。

B.高齢者に関する質問について

これらの質問は、高齢者に対する理解と偏見を検討する上から、重要であると考え実施した。質問項目と結果の特徴は、次のとおりである。(表1) この調査は、導入として実施した。

本調査結果は、アンケート調査の実施計画や対象者の年齢など基本属性が研究を目的とした前提でデータが収集されていないため、先行研究との厳密な比較はできない。しかし、今後の研究計画のため、実態を把握することは有益であると考えられる。先行研究においては、日本の中壮年者は米国の対象者よりも強い老人差別をもっていることが明確にされている[2)]。今回のアンケート調査結果も、高齢者が十分に理解されているとは言えず、同様の結果となっている。正答率は、合計が66.3%で、男性63.2%、女性69.3%となり、女性の回答率が男性よりも高くなっていた。先行研究においても、女性の回答率が男性と比較して高くなる傾向が報告されており、今回も同様の結果となっている。

各質問における正答率の特徴は、質問1、2、4の3項目においては90%を上回っているものの、他の12項目においては90%を下回っていることである。特に、質問5（男性48.5%、女性45.9%）、質問6（男性27.3%、女性32.4%）、質問12（男性21.2%、女性27.0%）の3項目においては、男女とも正答率が50%を下回っている。また、質問13においても男女合計の正答率（44.3%）が50%を下回る結果となっている。

表1　加齢の事実をめぐるPalmoreのクイズと正答率

番号	質問項目	正答率(%)		
		男性	女性	合計
1	65歳以上の高齢者の大多数は、認知症（記憶が落ちたり、ボケたりする）である。	87.9	94.6	91.4
2	高齢期では、耳や目などのいわゆる五感がすべて衰えがちである。	93.9	97.3	95.7
3	ほとんどの高齢者が、性欲がなく性的不能である。	66.7	75.7	71.4
4	高齢期では、心肺機能（肺活量）が低下する傾向がある。	84.8	94.6	90.0
5	高齢者の少なくとも10名中1人が養護老人ホームや特別養護老人ホームなどに入所している。	48.5	45.9	47.1
6	高齢者のドライバーは、65歳以下の若い人よりも交通事故を起こす率が少ない。	27.3	32.4	30.0
7	ほとんどの高齢者は、若い人ほど効率よく働けない。	72.7	78.4	75.7
8	約80%の高齢者は、通常の生活を送るのにさしつかえない。	66.7	59.5	62.9
9	ほとんどの高齢者は、自分の型にはまってしまい、なかなかそれを変えることはできない。	57.6	64.9	61.4
10	ほとんどの高齢者は、反応時間が長くなる傾向がある。	84.8	89.2	87.0
11	大多数の高齢者は社会的に孤立しており、またさびしい生活をしている。	57.6	78.4	68.6
12	高齢の労働者は、若い労働者よりも職場で事故にあうことが少ない。	21.2	27.0	24.3
13	大多数の高齢者は、政府が定めている貧困を下回る収入で、生活保護を受けている。	36.4	51.4	44.3
14	大多数の高齢者は、現在働いているか、または家事や奉仕活動等でもよいから、何らかの仕事を得たいと思っている。	81.8	86.5	84.3
15	高齢者は、年齢とともにより信心深くなっていく。	60.6	59.5	60.0
	合計平均	63.2	69.3	66.3

注：奇数番号は誤り、偶数番号は正解となる
出典：Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH、1988、p.423

C.ケース・スタディについて

ケース・スタディⅠ＆Ⅱの内容は、ACCESS TO HEALTHから著者が翻訳し、援用した。

【ケース１】

MarthaはJohnと結婚して37年になる。現在、Johnはアルツハイマー病を罹っており、彼の症状はMarthaを認識できないほど悪化している。以前は、明るくて頭脳明晰であったJohnだが、最近はとても怒りやすくなり暴言を吐くようになった。Johnの子供たちはかたくなに反対していたが、Marthaはある朝起床して、Johnの荷物をまとめ、100マイル（約160km）離れた老人ホームにJohnを連れて行った。Johnを毎日尋ねる必要もないし、自分自身の生活も取り戻したいと考えたのが、その理由である。

質問１　Marthaの行動を正しいと思いますか。

質問２　Marthaの決断に恐らく影響を与えたであろうアルツハイマー病の症状は何だと思いますか。

質問３　同じようなケースにおいて、あなたはどのように対応しますか。また、その理由は何ですか。

【ケース２】

74歳のBillは、元ビジネスマンで、6か月前に妻を亡くした。それ以来、多くの女性から結婚を求められたり、デートに誘われたりした。彼は(これからの人生で)単身生活をしたくなかったので、ある女性と同居するようになったことを子どもたちに伝えた。しかし、Billの子供たちは、特にBillと新しい女性友達が性的関係を持つことに対して激怒した。

質問１　Billと新しい女性の友人との性的関係に対する子供たちの反応をどう思いますか。

質問２　Billは子供たちの考えていることに、関心を払う必要があると思いますか。

ケース・スタディに対する学生の感想としては、「最初にやったケース・スタディの内容はとても興味深いもので、もっと様々な実際にあった事例を聞いてみたいと思いました」（男性）、「ケース・スタディの話に非常に興味が湧いた。実際に自分で起こったらどうしようと考えた」（男性）、「祖母を介護している祖父母を見ると、最初のケース・スタディで自分もマーシャと同じ決断を取ります」（男性）、「これからはより一層高齢者、特に後期高齢者問題は重要になってくると思うので、高齢者も社会の一員として活躍できる社会を形成していくべきだと思います」（男性）、「ケース・スタディは楽しかったが実際にそうなったら自分はどうするべきなのか、登場人物をどう思うのかリアルに考えることができてよかった」（女性）、などの報告があった。

D.サクセスフル・エイジングについて

サクセスフル・エイジングについて、下記の内容に基づき説明をおこなった。

1. Why Do We Grow Older?
   (A) Aging refers to inability of the body to maintain itself.
   (B) Biological theories.
   (C) Psychosocial theory.
2. The Aging Process.
   (A) The aging body: Physiological aspects.
3. Who Are the Elderly?
   (A) Profile of today's elderly.
   (B) Impact on society.
4. Special Problems of the Elderly.
   (A) Alcohol-related problems.
   (B) Aging and mental health.
5. Reducing Age-Related Problems: Adjusting and Adapting.
   (A) Exercise.
   (B) Diet.
   (C) Physical health.
   (D) Mental health.

E. 調査研究の紹介

著者の論文「高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響に関する研究」から、「方言の使用が高齢者の幸福感に及ぼす影響要因」について紹介した。

F. まとめ

1．老化に伴う変化の多くは避けがたいものであるが、高齢期の人生の質を高めるためになされることはかなり多いものがある。

2．今日の日本社会や米国社会で広がっている老人差別者の態度は老化のプロセスに関して多くの間違った、またはネガティブな考え方を増幅させる。

3．老化に伴って起きる心理生理学的な変化は、(五感の)感覚機能、心肺機能、筋骨格の機能、内臓の機能、性的機能が低下することが含まれる。

4．高齢者が新しいことを学ぶことに時間を要するが、学習能力が年齢ともに悪化するわけではない。

5．最適な老化を保証するためには、運動、栄養、精神衛生を個人の健康の総合的なプログラムとして取り組まなければならない。

G.アンケート調査と回答結果

1. 講義内容に関するアンケート調査の質問項目及び結果は、次のとおりである。

質問1　「講義の中で、あなたの興味・関心が最も高かった内容は何ですか。」

回答　①「ケース・スタディ」 18人(25.7%)　②「老年学全般」 21人(30.0%)
③「サクセス・フルエイジング」 23人(32.9%)　④「調査研究の紹介」 8人(11.4%)
⑤「その他」の回答はなかった。

質問2　「講義を通して、あなたがもっと知りたいと思った内容は何ですか。」

回答　①「高齢者と心身の健康」 10人(14.3%)　②「高齢者と社会問題」 11人(15.7%)
③「高齢者の生きがいや幸福感」 39人(55.7%)　④「老年学の内容」 8人(11.4%)
⑤「その他」2人(2.9%):記載内容は「高齢者の考え方」と「高齢者の思っていること」である。

質問3　「あなたと高齢者を比較して、あなたが優れている点は何だと思いますか。箇条書きで書いてください。」

【男性の回答】

・(聴覚などの五感)や身体能力（4人）　・大学やアルバイト、仕事等の活動できる場が多い
・学び・覚える記憶力　・身体能力（5人）　・運動機能　・健康で体が動く
・体力（5人）　・体力や力など身体的な面　・周りからの期待、可能性や選択肢のバリエーション
・運動能力（4人）　・特別何か優れている点はないと思う　・激しい運動ができる
・記憶力(2人)　・自分のできる（ことと）できない（こと）の範囲をしっかりと判断できる
・反射するのが早い　・健康な体　・時間　・行動面　・筋力　・体力や理解力　・健康面
・運動面　・行動力　・身体能力をはじめとする身体的な部分　・思考速度　・思考力　・力
・体力　・足の速さ　・物事の理解力等　・免疫　・若さ　・モチベーションや反応速度

【女性の回答】

・体力、俊敏に動くこと　・走る　・飛ぶ　・投げる　・身長　・記憶力　・活発さ
・高い音が聞こえる　・新しいものごとを覚える速さ　・身体能力（4人）　・運動能力（4人）
・体力的な面と機敏に動くことができる　・行動力　・身体機能（2人）　・運動機能
・運動能力が高い　・記憶力がよい　・体の自由がきくこと　・行動力

・挑戦できること（選択肢）が多い　・体力と記憶力だと思う　・身体能力の高さ（若さ）
・身体に不自由なく、自由に四肢を動かすことができる　・筋力　・身体的健康　・力の強さ
・機敏性　・記憶力　・聴力　・視力　・記憶力がある(3人)　・新しいものに対しての順応性
・体力がある（10人）　・早く歩ける、走れる　・健康　・代謝　・俊敏さは優れている
・免疫力　・学習能力　・頭の回転　・機敏に行動できる　・（体の）柔軟性（2人）
・動作、判断の速さなど　・物事の吸収が短時間でできる

質問４　「あなたと高齢者を比較して、高齢者が優れている点は何だと思いますか。箇条書きで書いてください。」

【男性の回答】
・仕事等の経験の差　・実際に見てきた社会の仕組みや歴史の知識　・情報
・知恵や人生経験（6人）　・経験の豊富さや教え方　・知恵が豊富である
・経験からくる冷静さ、ふところの広さ　・人脈、影響力　・人生の経験値（4人）
・今まで培ってできた経験　・様々な知識や雑学（5人）　・子どもがいる　・人生経験が豊富
・友人がいたりすれば、十分に楽しい生活を送ることができる　・経験（5人）　・応用力
・知識や人生経験（3人）　・色々な事での経験だと思います　・経験が豊富　・自由な生活
・優しさ　・経験と許容力　・知識や時間のゆとり　・年輪
【女性の回答】
・適応能力・豊富な知識（16人）　・心の寛大さ（2人）　・今まで培ってきた知恵（3人）
・思考　・語彙力　・文章力　・技術　・人生経験が豊富（17人）
・長年生きてきた間で培った生きる知恵や人生経験　・判断力など　・判断能力(2人)
・おばあちゃんの知恵袋みたいな、生活の知恵をたくさん知っている　・考え方
・しがらみが少ない　・農業とかに従事できる　・精神面
・高齢者が長い人生で培ってきた経験と知恵だと思う（2人）　・対人関係をうまく築く
・自由なところ　・生活スタイルの良さ（早寝、早起きなど）　・落ち着き感（2人）
・正しい判断ができること　・要領が良いと思う　・判断力　・物事をよく知っている
・慣れている　・気遣い　・落ち着き　・長い人生に基づいた深い考え

質問５　「その他、質問や感想がありましたら、自由にご記入ください。」

【男性の回答】
・「これからますます高齢化するといわれるこの日本で生活していく上で、老年学を学ぶ必要性を強く感じた。」
・「高齢者になっても外に出て活発な高齢者になりたい。これからも一層高齢者を大切にしなくてはならない。」
・「今まで知らなかった分野のことだったのですごく興味深い内容だった。」
・「今友達が少ないと、高齢になった時はますます少なくなると聞いて、もっと社交的になろうと思いました。」
・「今日の授業では年をとっていくと友人が減っていくと言っていました。それは、長いつきあいのできる友人を今から一人でも多く作って、今後の生活を楽しく生きていきたいと思わせるような講義でした。」
・「一番最初にやったケース・スタディの内容はとても興味深いものでした。もっと様々な実際にあった事例を聞いてみたいと思いました。」

・「高齢者になった時、人とのつながりは非常に大切だと感じた。自分も今のうちから、健康に気をつけた生活（運動など）を心がけたい。」
・「学習に要する時間が増えるだけで、学習能力自体が落ちるのではないというのは初めて知った。」
・「英語の時間でもないのに、英語の量が多く、英語の苦手な私にとって、読むのが辛かった。高齢者にとっての生きがいや幸福感は、体を動かすことからも見つけられるかもと思いました。」
・「自分の老後を考える良い機会になりました。ありがとうございました。」
・「ケース・スタディーの話に非常に興味が湧いた。実際に自分で起こったらどうしようと考えた。」
・「祖母を介護している祖父母を見ると、最初のケース・スタディーで自分もマーシャと同じ決断を取ります。これからはより一層高齢者、とくに後期高齢者問題は重要になってくると思うので、高齢者も社会の一員として活躍でいる社会を形成していくべきだと思います。」

【女性の回答】
・「ケース・スタディーは楽しかった。実際にそうなったら自分はどうするべきなのか、登場人物をどう思うのかリアルに考えることができてよかった。」
・「高齢者になっても運動をして、生きがいや、自身を持って生きたいと思いました。高校までは部活動をやっていたのですが、大学生になって何もやっていなかったので、また、運動を始めてみたいと思いました。食生活を改善しないと、20年後がやばい！と思ったので、自分も、家族も巻き込んで改善したいと思いました。今日の、講義、聴けてよかったです。ありがとうございました。私の祖母、親せきも、宮古出身の浦添市在住者で、私も宮古の郷友会に毎年参加をしているので、興味を持って聴くことが出来ました。」
・「高齢者について勘違いしていることも多くあり、ほんの一部分しか理解していないことに気づいた。」
・「言葉というのは、その土地にある方言を使うことで幸福感を抱くことにもつながるのだと分かった。」
・「方言について、自分も方言を理解しておばあちゃん達と話したいなと思った。」
・「調査研究で、方言と「幸せ」の関係など、興味を持ちました。私はほとんど話せないし聞けないですが、うちなーんちゅなんだから話せたらいいなと思いました。」
・「裏のクイズを通して、自分が思っているよりも高齢者は肉体的にも精神的も元気なことにびっくりしました。」
・「高齢者にとって孫ができるということはやっぱり嬉しいことなんだとわかりました。私も祖父母が元気な内にたくさん会話をしたいと思います。」
・「高齢者の人たちは方言を喋ることが多いので、私も方言を覚えて、おばーと話したいと思った。あまり、他人に迷惑・世話をかけるようにならないようにしたいなと思った。友達を大切にして、もっと増やしたいと思った。」
・「年をとることは怖いですが、いろんな人が高齢者に対する理解を深めることができたら、高齢者も生きやすくなると思います。」
・「老年学というものがあまり聞いたことがなかったので、もっと詳しく知りたいと思いました。」
・「老年学は、今後日本が超高齢社会になるにあたってとても重要な学問になると思うので、老年学をもっと広めていくことが今の日本にとって必要だと感じました。」
・「高齢者について考えるときに、自分の祖母・祖父ぐらいしか具体的な比較対象が思いつかなかったので、一般的な高齢者のイメージとはなんなのかなぁーと思った。」
・「高齢者に対する偏見が結構あったと感じた。」
・「高齢者になると身体の機能が衰えてくるというのはあっても、だからといって（交通）事故が

多いとは限らない。偏見が取り除かれました。高齢者には、自分の能力をうまく操う判断力（＝能力）があると考えられるな…とふと思った。」

・「これから、高齢者がどんどん増えていく中で、老年学は重要なものになっていくだろうなと思いました。宮古島出身の方が方言で話すことで幸福感を感じるというのは初めて知ったので驚きました。若い世代は方言を話せる人が少ないですが、方言を活用して、高齢者の方とコミュニケーションをとれるようになったらよいのではないかと思います。」

・「方言のところは面白いと思った。私は方言が話せないけど、やっぱり内地（他府県）の人の言葉が何となくちがうと感じるときがあります。沖縄の友人同士で話していると違和感がないので、安心できるのかなーと思いました。」

・「自分が実際高齢者になったときのことをいつもよりイメージして考えることができた。」

・「方言により高齢者の方々が幸福感を感じているということを初めて知りました。私は熊本出身なので、日常生活で方言を使っているのですけれど、そういう風に考えたことはなかったので驚きました。しかし、方言で会話するということで確かになじみを感じられるし、笑う機会も多いように思います。「方言で話す」というだけでコミュニケーションを楽しめるのであれば、地元の高齢者と触れ合える機会に私も参加して、みんなで方言で会話をし、高齢者の方々に元気になってもらいたいと感じました。」

・「今回、高齢者にとって大切なのは身体面でのサポートであるという考えが変わりました。大切なのは精神面の充実であり、それは友達同士のネットワークや伝統行事への参加などでコミュニケーションを楽しみ笑っていることなのだと思いました。高齢者というと何もできないと考えがちですが、それは私たちの勝手な偏見だったのだと気付きました。そして「方言」というものの役割がこんなにも大きいのだと知り、驚きました。確かに方言は懐かしさがあり、慣れた言葉で安心することができると納得しました。色々な面で私達が高齢者をサポートしていく必要があると思いました。」

・「「今、友達が少ないと老後、友人を増やすのは難しい」との言葉を聞き、うちあたい（人の振りみて我が振り直せ）しました。少ない友人であっても自分が毎日楽しく過ごせれば、それはそれで良いと感じました。」

---

2. 次に、高齢期に対する学生の考えや備えについて、回答内容を通して紹介する。

質問１　「今私にとって人生で一番大切なことは＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿である。」

【男性の回答】

・本を読むこと　・楽しく生きること（2人）　・前進していくこと　・生きがいを見つけること
・勉強すること（3人）　・卒業後の人生を計画すること　・友人　・家族　・健康である
・大事な事を見つけること　・好きなことをすること　・身の回りの人たち　・今を生きること
・これからの人生に役立つ勉強をすること　・経験　・人と深くつながっていくこと
・誰かといる時間　・（大学の）単位　・健康で毎日楽しく過ごせること　・寝ること　・充実感
・夢をかなえること　・身近な人　・学校生活　・今を生き抜くこと　・就職できるかどうか
・大切なことを探す時間　・今を生きることが大切です　・目標に向かって努力すること

【女性の回答】

・家族の健康　・お友達　・笑顔でいられること　・明るく生きること　・遊ぶ　・文武両道
・人との出会い　・家族、友人（2人）　・自分のこと、周りのことをしっかり考え行動すること
・勉強すること　・愛する人がいるということ　・将来のこと、就職など　・健康であること
・前向きに生きること　・いろいろな事を経験すること　・自分が好きな事をみつけること

・キリスト教中心の生活を送ること　・前向きに生きること　・笑って生活すること（2人）
・友人とのコミュニケーション　・時間を無駄にしない　・急がしい毎日をこなすこと　・愛
・立派な大人になること　・周りの人達との関わり　・心身の健康を保つこと

質問2　私が70歳になったとき、私とって一番大切なことは、多分＿＿＿＿＿＿＿＿である。

【男性の回答】
・普通に生活できること　・健康（4人）　・他者に迷惑をかけないこと　・毎日満足できるか
・運動すること（散歩など）　・家族のこと（4人）　・楽すること　・孫　・家族や親せき
・自分の子供が生きていること　・充実した生活を送ること　・身の回りの人たち　・歯
・楽しく生きていること　・人とのつながり　・残りの人生をどう過ごすか　・一人でいる時間
・年金をもらえる　・子ども　・充実感　・わからない　・その時を生き抜くこと
・孫やゲートボール　・自分の人生に意味を見つけ、一日一日大切に生きること
・世界平和の実現

【女性の回答】
・家族、健康（3人）　・孫とお友達　・変わらずに笑顔でいられること　・家族（3人）
・家族とのコミュニケーション　・どう楽しく過ごすか　・周りを幸せにすること
・生きがい（2人）　・家族とすごす時間　・大好きな人と一緒に暮らしていること
・子や孫など家族、友人　・楽しく生きること（2人）　・自分が幸せと感じられること
・キリスト教中心の生活　・今の大切なことと一緒だと思う
・楽しみとなることを見つけること　・生きがいをもつこと　・子供、孫といる時間
・生きがいや楽しみを得ること　・周りの人達との関わり　・笑うこと　・毎日を楽しむ

質問3　年を重ねることで楽しみにしていることは、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿である。

【男性の回答】
・多くの知識を身につけること（2人）　・定年後の時間（趣味に打ち込む）　・自身の成長　・孫
・時代の移り変わりを見ていくこと　・自分に深みや厚みがでること　・自分の家族をもつこと
・まだ生まれていない子どもが育つこと　・精神的に変化があること　・人生経験を多くすること
・友人が増える　・様々な人と出会うこと（2人）　・老後　・子や孫　・後輩との飲み会である
・新しい出会い　・視野が広がる　・人とのつきあい　・様々な経験ができること
・自由に使えるお金と時間　・人生経験の豊かさ　・思い出が増えること　・趣味が充実している
・未来予想　・大人らしさの増大　・自分の知識や経験、振り返って楽しい思い出が増えること
・能力の向上

【女性の回答】
・家族が増え、友人が増え、楽しくなる　・経験　・新しい出会い　・自分自身の成長
・人生経験が豊富になること　・自分の時間が増す　・家族が増えること（3人）
・さまざまな幸せな出来事　・友達が増えること　・自分自身、周りの変化　・あまりない
・社会にしばられないで、開放感を感じれそうなこと
・人生経験を積むことで魅力的な人間になる
・今とは違った世界の見え方ができる（と思う）　・仕事、家族　・自由な時間
・新しい出会いがあり、人生が豊かになること
・知識が増え、考え方（視点）が広がりそうなこと（2人）　・いろんなことを知ること
・自分を含む環境の変化　・大人になった自分に気づくこと　・多くの人に出会えること

・その年にあったライフステージを送るとか、結婚とか　・いろんな考えを持つことができる
・子どもが生まれ、孫が生まれ育てていくこと

質問４　年を重ねることで最も心配していることは、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿である。

【男性の回答】
・身体能力の低下　・動けなくなること　・運動能力の低下（2人）　・他に迷惑をかけること
・思った以上に早く死ぬのではないかということ　・健康状態のこと　・友の死
・体力がいうことをきかなくなってくるのではないか　・どんどん悪化していく親の健康
・身体的に衰えが出来ること　・体の衰え（2人）　・動けなくなること　・理解力低下　・発病
・自分自身の体力の低下と健康管理　・社会進出　・事故やけがである
・体力低下にともなう病気　・病気などで寝たきりになること　・ひざの痛み　・身体の不自由
・親しき人がいない　・老い　・死（2人）　・体力の衰え　・人に介護されること
・病気になること（3人）　・日常生活を自分でこなせなくなること　・社会問題の解決

【女性の回答】
・周りの人が死んでいくことや認知症になること　・肌のおとろえ　・病気などへの免疫
・自分を含め、まわりの人たちの健康　・老い　・介護　・いろいろな死と向き合うこと
・肌荒れ　・体が衰えていくこと（3人）　・体の自由がきかなくなること　・身体的健康面（5人）
・体力の衰退　・物忘れ　・見た目　・古い記憶を忘れていくのではないか　・生活費　・介護
・配偶者との死別　・コミュニケーションがとれなくなってしまうかもしれないこと
・思いとはギャップのある自分に苦悩するのでは…　・病気やけが　・体が動かなくなること
・体力や健康　・お金　・自分が老化に伴って、できなくなることが増えていくこと（2人）
・体力の衰え

質問５　もし私の両親が自分たちのことができなくなったら、私は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

【男性の回答】
・自分で世話をしたい（8人）　・できる限り、介護をしたい（4人）　・面倒をみたいと思う（3人）
・(両親にこれまでやってもらったことのお返しとして)代わりに世話をしたい　・兄弟で介護する
・今後施設等に入れる（3人）　・責任を持って世話をする　・介護施設にあずける
・一緒に住む　・できるだけ助ける　・逆にしてあげる　・とてもショックをうける
・面倒見れる自信がない　・助けたい　・養う　・できる範囲で助ける

【女性の回答】
・自宅で世話をしたい（3人）　・できる限りのことはしたい（3人）　・進んでお世話したい
・しっかり介護したい（8人）　・頑張る　・お手伝いしたい（3人）　・ヘルパーを頼む
・兄弟と協力し、助けたい（2人）　・出来る範囲で介護したい　・親の介護をする（3人）
・ショックをうけるが、できる限りサポートする

質問６　もし私が自分自身のことができなくなったら、私は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

【男性の回答】
・子どもの世話にはなりたくない　・人に助けてほしい（2人）　・申し訳なさを感じるだろう
・これ以上生きたくないと思うかもしれない　・配偶者や子がいたら、面倒をみてもらう（2人）
・家族に頼りたい　・施設に入る（4人）　・自殺するかも　・子供や友人と住む
・周りの人々に頼る　・老人ホームにいく（2人）　・わからない（3人）

・子供に世話させるか老人ホームに行く　・周りにまかせる　・迷惑をかけないよう施設に行く
・できるだけ早く死にたい（3人）　・家族の重荷にならない道を選びたい　・養ってもらう
・入院する　・大人らしく身を引く
【女性の回答】
・周りによろしくされたい　・自分の子供がみてくれたら幸せ　・施設に入る（4人）
・あまり家族に面倒をみてほしくない　・家族に助けてほしい（2人）
・まわりの人々に支えてもらいたいが、自分にできることをしたい
・（できない程度が酷ければ）死にたい　・老人ホームに入るか、ヘルパーをつけてもらう（4人）
・出来る限りリハビリする　・これからどうするか考える　・介護を希望する（2人）
・家族に迷惑をかけたくない（2人）　・誰かに助けを求められるようになりたい
・だれかに支えてもらう（2人）　・ヘルパーか子供とかに助けてもらう　・とても悲しくなる
・子どもに会議してもらいたい

質問７　私が高齢者のことを考えたとき、脳裏に浮かぶ言葉は、＿＿＿＿＿＿＿＿である。

【男性の回答】
・悲しい　・アルツハイマー　・意味なき延命　・未来の自分　・活動的な生活　・平和
・人生の先輩　・両親　・終盤　・こわい　・年の功　・病気　・老い（2人）
・おじいちゃん　・とても弱い　・危険である　・孤独死　・時間がたくさんある　・ボケ
・病気と自由　・生活苦　・大丈夫？　・孤独　・満足　・かよわい　・ごめんなさい
【女性の回答】
・大切な人々　・幸せ　・福　・老い　・介護　・楽しそう　・介護　・落ち着き　・衰
・やさしい　・のんびり　・税金の問題　・安心感　・いきいきと笑顔　・認知症や寝たきり
・おじぃ、おばぁ（2人）　・穏やか　・孤独（3人）　・年金　・健康　・生きがい
・長寿の沖縄県　・寿命があとどれくらいかな　・二人で暮らしている祖父母　・老人ホーム
・老化に伴う認知症等病気のこと　・余暇

質問８　私は心身共ともに充実した生活を送るために、現在次のようなことをしている。

【男性の回答】
・健康管理に気をつける　・今を生きることも大切だが、先をみすえて生きている
・運動している（2人）　・全てにおいてプラス思考に考える　・筋トレやウォーキング
・健康的な生活をするようにしている　・好きなことをしている
・実は何も考えずに与えられた一日一日を楽しんでいる　・たまに息抜き　・早寝早起き
・多くの趣味を見つけ、普段出来ないことを多く見つけること（2人）　・バイト　・食生活
・今は何もしていないけれど、友人をもっと増やしたい　・運動　・勉強　・今を精一杯生きる
・チャレンジできることはチャレンジしている　・後悔のないように今を過ごす（2人）
・部活（2人）　・特に何かをしているわけではない　・特になし（2人）
・大学をそこそこまじめに出席すること　・三日に一回は体を動かす
【女性の回答】
・毎日笑っている　・忙しいスケジュールをつくる　・楽しい予定を立てる　・友人を大切にする
・家族や友人とのつながりを大切にしている　・規則正しい生活を心がけている
・いろいろな人と話したりして、様々な知識、考えを身につける　・食生活の見直し
・スポーツをしたりして自分の好きなことを楽しんで、頑張って、いつも前向きに笑顔でいること

・ご飯を美味しく、しっかり食べている　・目標をたてる　・食生活に気をつけている
・友達を大切にし、いろんなはなしをして、遊んで、おいしいものを食べている　・運動
・友人、家族を大切にしたいと思っている。今しかできないことに挑戦している
・腹八分にしている　・前向きに楽しむ、できることは今のうちにやっておく、etc.
・自分の好きな事をできるだけする
・忙しくでも急いでいても、心と体が辛くなったとき、休息をとる勇気を忘れない、ということ(めりはり)
・よく寝、よく食べ、よく学び、よく運動している　・できることはなるべく積極的に参加する
・サークルで運動している　・趣味や生きがいを見つけ、毎日の生活を楽しむ
・色々な人との出会いを大切に、常に笑顔で過ごす
・野菜を多く摂る　・ストレッチ、軽い運動、音楽を聴く

VI. 考察

講義の実施内容と学生のアンケート調査結果を踏まえて、学生の老化に関する考えの特徴、老年学の必要性、老年学部の設置の可能性について考察する。

高齢者の身体的及び精神的機能の現状に関する質問から、高齢者の現状が十分に理解されていないことが考えられる。正答率が合計で66.3％となっており、3割強が誤答で正しく理解していない。このことは、高齢者に対する偏見や差別意識を生むこと、かつ自分自身の老化を拒否することにつながることも考えられる。男女比においては、男性63.2％、女性69.3％で女性の回答率が男性よりも高くなっているが、先行研究においても、女性の回答率が高くなる傾向を示しており、今回も同様の結果となっている。Donatelle(1988)は、米国における調査結果では、学部学生の正答率は65%、大学院生80%、大学教官90%であると報告している[15]。

また、各質問の回答率では、質問1、2、3の3項目においては90%を上回っており、「高齢者の大多数が認知症などの病気に罹患していないこと」、「五感がすべて衰える傾向にあること」、「高齢者では肺活量が衰える傾向があること」など病気や身体面の老化については、概ね理解されていると推測される。しかしながら、他の12項目では90%を下回っており、講義など教育の機会を通して正しい老化の過程を学ぶ必要性があると考えられる。特に、質問5においては、男性48.5%、女性45.9%で「多くの高齢者が高齢者施設に入居している」、質問6は男性27.3%、女性32.4％で「高齢者が運転をすることは危険である」、質問12は男性21.2％、女性27.0％で「高齢の労働者は職場で若い労働者よりも事故にあうことが多い」という誤解があるものと考えられる。これらのことについては、社会学的な領域からのアプローチが必要であると考えられる。これら3項目においては、男女ともに正答率が50％を下回っている。また、質問13においても合計正答率が44.3%で、「大多数の高齢者が貧困である」という誤解があるものと推測される。

このような傾向は、柴田(2000年)が実施した研究でも同様な傾向となっている[2]。このことについて、柴田は、老年学の研究が熟していない時期においては、社会の中で支援ニーズの高い障害や貧困者等の高齢者にのみが注目されるので、偏見が生まれやすい環境にあることを述べている。このことは、社会が成熟し、教育の機会が提供されることで正しい老化の過程が理解され、かつ高齢者の実態が明確となり、高齢者に対する差別や偏見がなくなることを示唆しているものと考えられる。

本講義の終了後、学生の中には「これからますます高齢化するといわれるこの日本で生活していく上で、老年学を学ぶ必要性を強く感じた」、「今まで知らなかった分野のことだったのですごく興味深い内容だった」、「高齢者について勘違いしていることも多くあり、ほんの一部分しか理解していないことに気づいた」、

「老年学というものがあまり聞いたことがなかったので、もっと詳しく知りたいと思いました」などの感想を述べており、老年学の必要性が理解されていると考えられる。

また、高齢者から連想する言葉が、男女間にはポジティブな言葉とネガティブな言葉の記載頻度に差が見られるものの、全体的には「アルツハイマー」などの「病気」、「こわい」などの恐怖心、「孤独死」などの「孤独」、「衰」などの言葉が記載されている。このことから、正しい老化の過程が十分に理解されていないと考えられるため、老年学を通して、客観的に高齢者の実態を把握することも必要であると考えられる。

このような状況において、正しい老化の過程や高齢者の実態を理解する観点からも老年学の確立は急を要するものと考えられる。超高齢社会を迎え、多くの人々が高齢期を経験する我が国における、老年学の確立は、老人差別や偏見の克服、生涯発達を視野に入れた高齢者の生きがいや主観的幸福感の意味づけ、そして正しい老化のプロセスを理解することに寄与するものと考えられる。

次に、我が国の大学で老年学を学部課程や大学院で設置することは可能であろうか。老年学は、学際的な学問であり、医学、生物学、心理学、社会学など多くの領域の学問が有機的に連携する必要がある。そのことについて、柴田(1999)は、大学教育のすべての分野を学際的に統合する作業の必要性を強調している[3]。もし、単独の大学で学際的な統合が確立できない時は、複数の大学が連携して老年学センターなどの研究機関を設立する必要性についても言及している。幸いにして、琉球大学は医学部を有する総合大学であり、その可能性は高いものがある。また、琉球大学単独で学際的な統合ができない場合、隣接する大学か沖縄科学技術大学大学院など複数の大学が連携協力することで老年学の確立は可能となるのではないだろうか。また、沖縄県の地理的優位性を生かし、台湾や中国、そして東南アジアと連携協力を図ることで、アジア地域における老年学教育の拠点となる可能性があると考えられる。

一方、米国においては、ユタ大学老年学センターがユタ大学、ユタ州立大学、ウェーバー州立大学、南ユタ州立大学、ブリガムヤング大学と連携して、ロッキーマウンテン老年学プログラムを誕生させた。この例は、複数の大学が統合することにより、老年学センター等の研究機関を設置する際のモデルになるのではないだろうか。また、南カリフォルニア大学、南フロリダ大学、ケンタッキー大学など老年学に関する最前線の研究及び教育施設は我が国か本県の先行モデルとなり得るものと考えられる。

将来、我が国の大学においても高等教育老年学協会や全国高齢化教育学習学会など国内外の研究機関と連携を図ることで、老年学部（学科）を設置し、老年学に関する学校教育や生涯教育の拠点となり得る可能性がある。

今後、老年学に関する講義の機会を増やすことで、各論を充実させることにより、授業内容の質を高める必要がある。また、関係学部学科と連携を図ることで、研究の質を高めることができるものと考える。

老年学は、学際的な学問であり、領域の越えた学問の融合、かつ学校種の連携や生涯教育とのコラボレーションも必要である。小学校、中学校、高校、大学において授業や講義、高齢者との交流活動を通して、生涯発達の視点から高齢期を考える機会を得ることで、個人レベルだけではなく集団として幸福感を高めながら、人生の質も高めていくことが必要であると考える。

引用文献

1）高齢社会白書（内閣府）：http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2009/gaiyou/pdf/1s1s.pdf　入手日　2009年　7月31日

2）国際長寿センター：日本におけるジェロントロジー確立に関する報告書　2000.

3）柴田博：アメリカ合衆国の老年学教育、老年社会科学、21(3)：358-371、1999.

4）Maddox R、嵯峨座晴夫：エイジング大事典、626-628　早稲田大学出版部、東京、1997.

5）柴田博：日本応用老年学会の使命、応用老年学、1(1)：2-8、2007.
6）Havighurst RJ: Successful Aging. The Gerontologist, 1:8-13, 1961
7）小田利勝：サクセスフル・エンジングの概念と測定方法、人間科学研究、11(1):17-38、2003
8）松本啓子、若松淳子：Successful Agingに関する研究の概観と今後の課題―海外文献からの検討、川崎医療福祉学会誌、15(2)：403－410、2005
9）Larson R: Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. The Journal of Gerontology, 33,109-125, 1978
10）中谷陽明：高齢者の主観的幸福感と社会参加. 下仲順子編：老年心理学、pp141、東京、培風館、1997.
11）八代京子他：異文化トレーニング―ボーダーレス社会を生きる―、pp144-145、東京、三修社、1998.
12）佐藤秀紀、中嶋和夫：高齢者の主観的幸福感を規定する要因の検討、社会福祉学、37(2): 1-15,1996
13）野邊政雄：地方小都市に住む高齢女性の主観的幸福感、教育実践学論集、7:59-69、2006.
14）Erikson H, Erikson M, and Kivnick Q：Vital Involvement in Old Age. 1986.
朝長正徳、朝長梨枝子訳：老年期　生き生きしたかかわりあい.pp55-77、みすず書房、1990.
15）Donatelle J. R., Davis G.L., Hoover F.C. Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH、423
1988, Pretice-Hall, Inc. New Jersey.

参考図書

1．Donatelle J. R., Davis G.L., Hoover F.C. Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH
1988, Pretice-Hall, Inc. New Jersey.
2．安藤進　他、老化のことを正しく知る本、東京、中央出版　2000.